

魏晋南北朝の歴史語りと文学

Nara Women's University

人文科学系・言語文化学領域　**大平　幸代**　教授　OHIRA Sachiyo　博士(文学)(奈良女子大学)

■研究キーワード　中国 / 魏晋南北朝 / 古小説 / 怪異 / 史書 / 地方文化 / 古典詩文

■主な所属学会　日本中国学会,東方学会,六朝学術学会

■研究者総覧　https://koto10.nara-wu.ac.jp/profile/ja.3b2b2b105f562b55520e17560c007669.html

研究者総覧

研究概要

中国・魏晋南北朝時期の文学を研究しています。動乱の中で、南北・東西方向に大規模な移動が起こり、新たな文化の流行が次々と生み出されていった時期、人々は何を語り記し、「歴史」をつむぎだしていったのでしょうか？当時のさまざまな事例をとりあげながら、社会階層の変動と歴史認識、言語表現の関わりあい方を明らかにすることを目指しています。

〈近年の研究テーマ〉
・晋末から劉宋時期の北伐をめぐる「語り」
・文武の士の出鎮と文学活動
・荊楚の地志と地域の記憶
・山水美と神怪の感得、そしてその記録





陶淵明も本を読んで楽しんだ！

上:『山海経図』より
右:陶淵明「山海経を読む詩」
(『重訂文選集評』巻七)

研究のプロセス・研究事例

テキストの読み方は一つではありません。よく知られる作品も、角度を変えれば、別の見方/楽しみ方ができます。例えば、

1)「桃花源記」を同時代の荊楚の地志とならべて読んでみる
陶淵明の時代、彼の暮らしていた江州(尋陽)や「桃花源」があったという荊州(武陵)の地志がいくつも編纂され、地域の山水や伝説が記録されました。その中には、桃花源に似た、洞窟のむこうの田畑や、美しい山水の中で太古の人と同じような暮らしをつづける人たちのことが記されており、「神境」とよばれる場所さえありました。こうした地志の中の「神境」と「桃花源」との最も大きな違いは、桃花源が二度と訪れることのできない閉ざされた場所であることです(地志に記されるのは実在の場所なので、もちろん往来可能)。陶淵明は、人々から税を取り立てる一方、山水遊覧にふける風流太守たちを、彼の理想を体現した人境/神境＝桃花源から遠ざけ、自ら遊ぶための空想の文字空間を自らの筆で作り上げたのかもしれません。

2)『世説新語』の逸話から地方文化・地域の伝承を見出す
後漢末から東晋末の著名人のエピソード集である『世説新語』は、さまざまな人の語り/記憶の集積とも言えます。『世説新語』の最初の一条、豫章太守・陳蕃(ちんばん)と隠士・徐孺子(じょじゅし)の話もその一つ。赴任した陳蕃が真っ先に行なったのは徐孺子に会いに行くことだった！という逸話で、その主眼は、地元の著名な隠士(賢人)を大事にする太守を称えることにあります。二人とも後漢の人ですが、仔細に見てみると、晋宋期の人々の興味や価値観が反映され、巧妙に語り口が変えられていることが分かります。さらに、この話の背後には、歴代の豫章太守が行なってきた祭祀の伝統、地元で語られていた陳蕃をめぐる怪異譚などが存在したことが分かります。一つの短いエピソードの奥に、歴史的・地理的な広がり、語りの空間が見えてくるのです。

お問い合わせ：奈良女子大学社会連携センター　Tel:0742-20-3734　Mail:liaison@cc.nara-wu.ac.jp

更新日：2025年1月1日